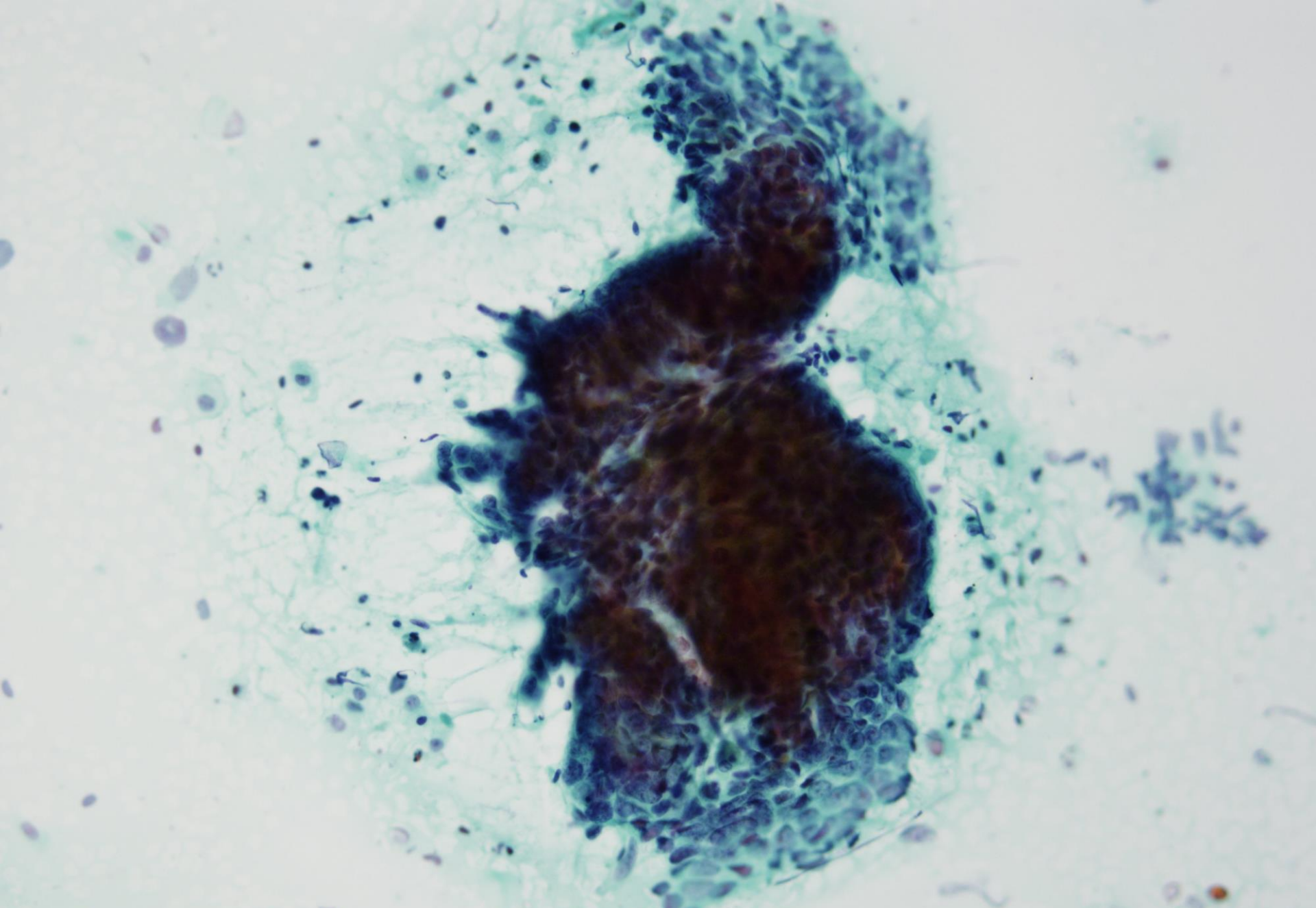
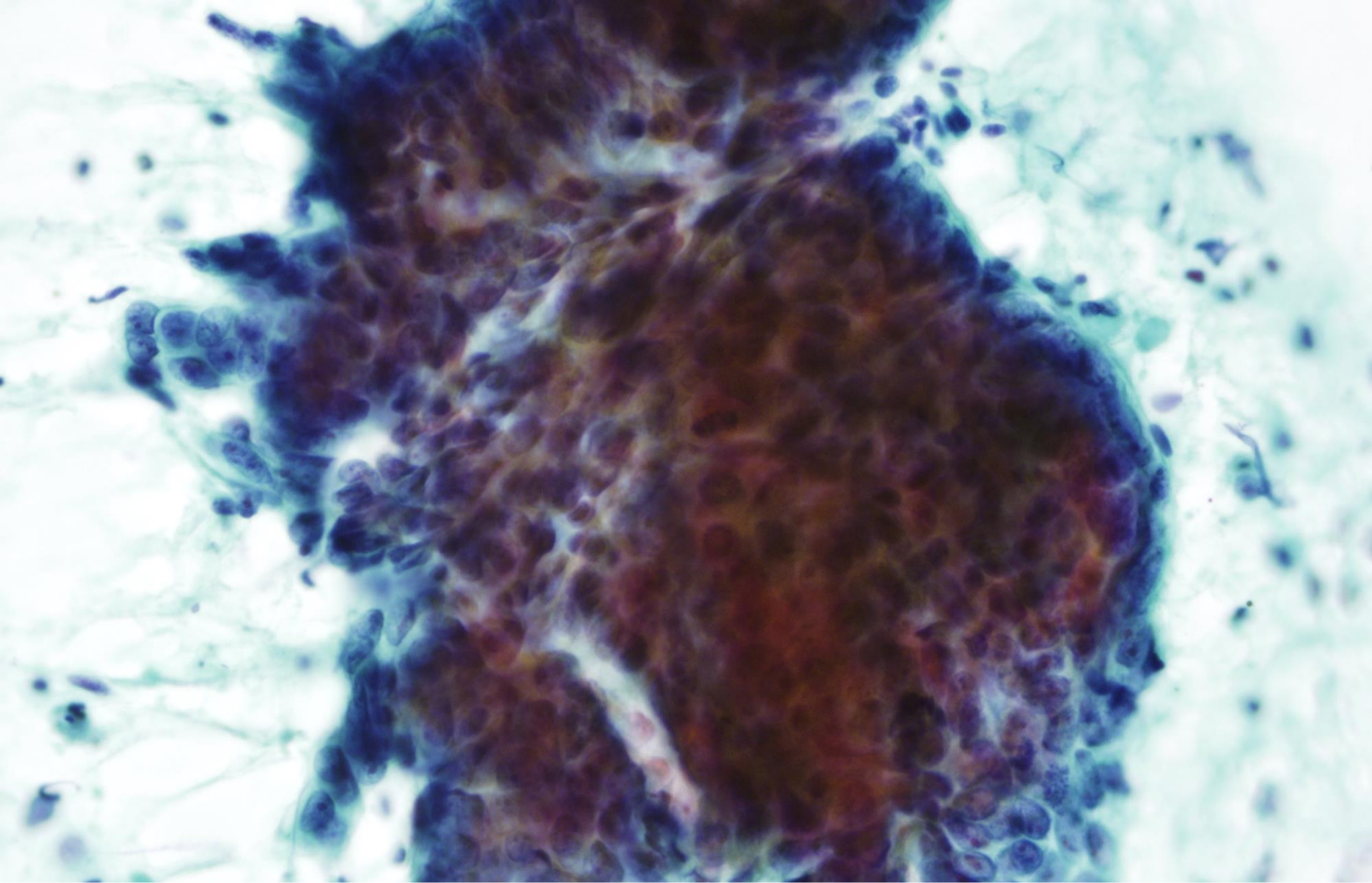


# 症例1 婦人科

- 症例：60歳代、女性
- 主訴：不正性器出血
- 採取部位：子宮内膜
- 採取法：擦過（ブラシ）

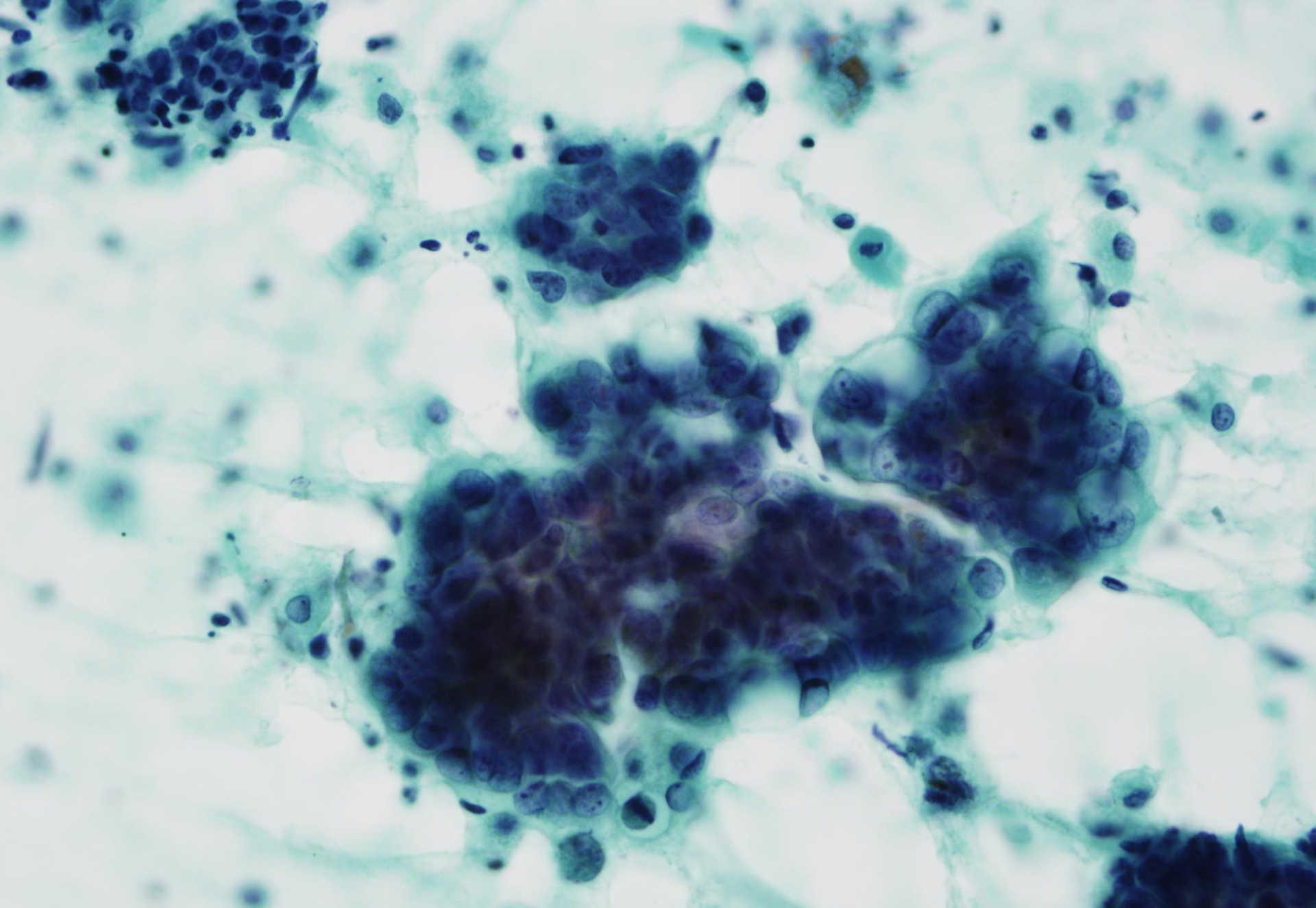


血性背景に辺縁不整な腺管状集塊を認める。 対物 × 20



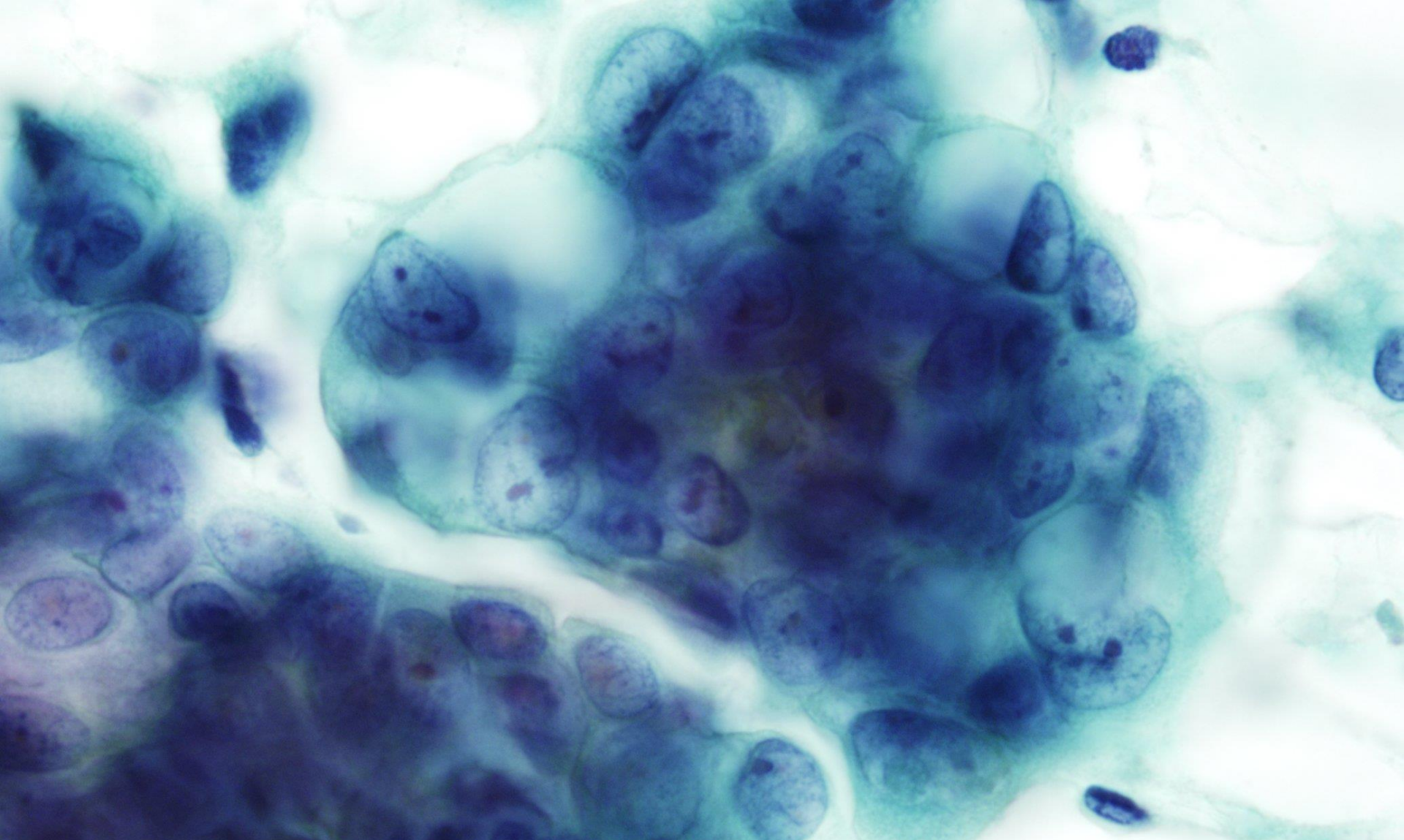
重積性が強く、核小体の腫大や集塊辺縁ではほつれがみられる。  
対物 × 40





球状ないし小乳頭状を呈する細胞集塊を認める。対物 × 40





不規則な重積性を呈し、集塊を構成する細胞には核の大小不同、核形不整や核小体の腫大を認める。細胞質に空胞を有する細胞も混在している。 対物 × 100

# 細胞像のまとめ

- 重積を伴う辺縁不整な腺管状集塊
    - 集塊辺縁の結合性の低下・ほつれがみられる
    - 構成細胞には核小体の腫大を認める

⇒ 類内膜腺癌
  - 不規則な重積性を呈する球状・小乳頭状集塊
    - 集塊を構成する細胞には核の大小不同、核形不整、核小体の腫大や細胞質に空胞を有する細胞がみられる

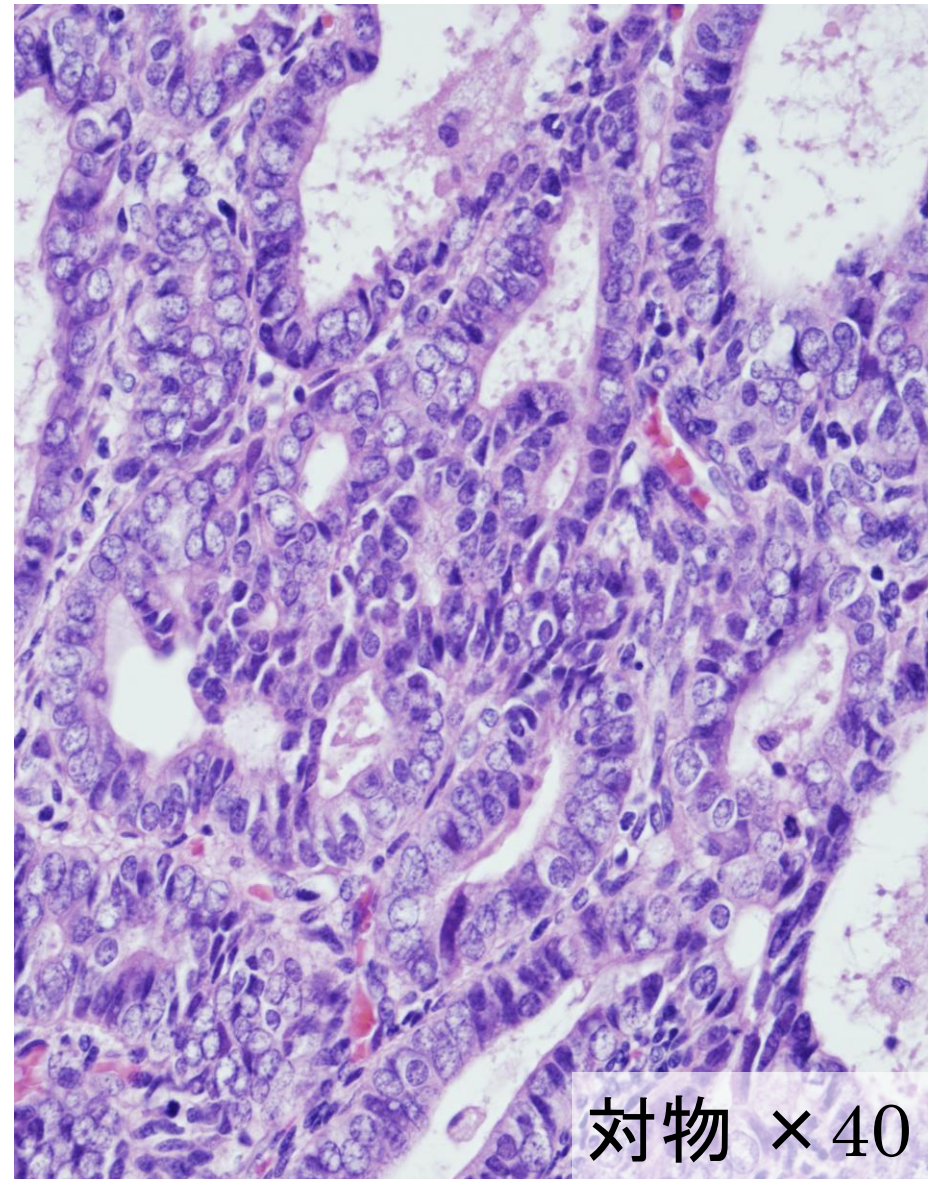
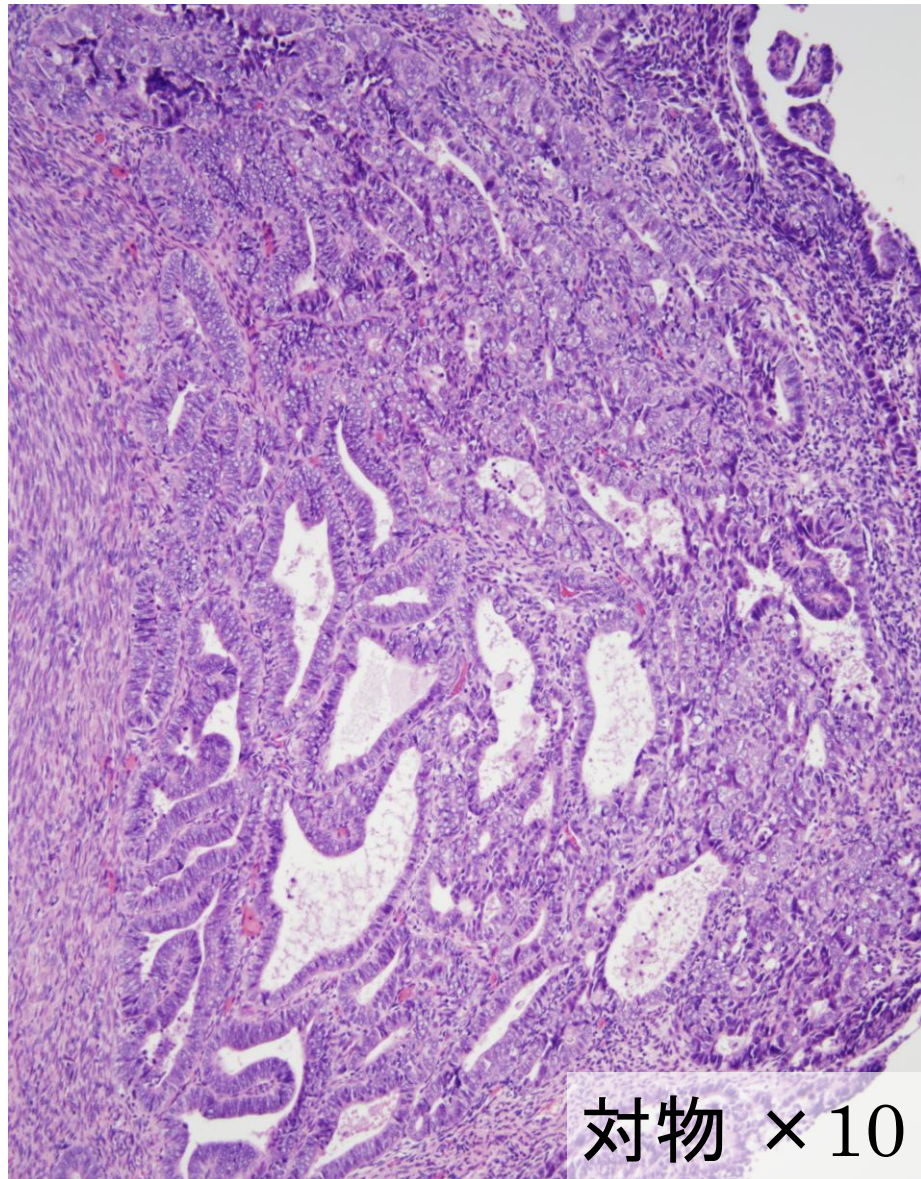
⇒ 漿液性腺癌
- ☞ 2種類の異なる細胞集塊が出現している

# 選擇肢

1. 類內膜腺癌 G1
2. 類內膜腺癌 G3
3. 漿液性腺癌
4. 明細胞腺癌
5. 混合癌



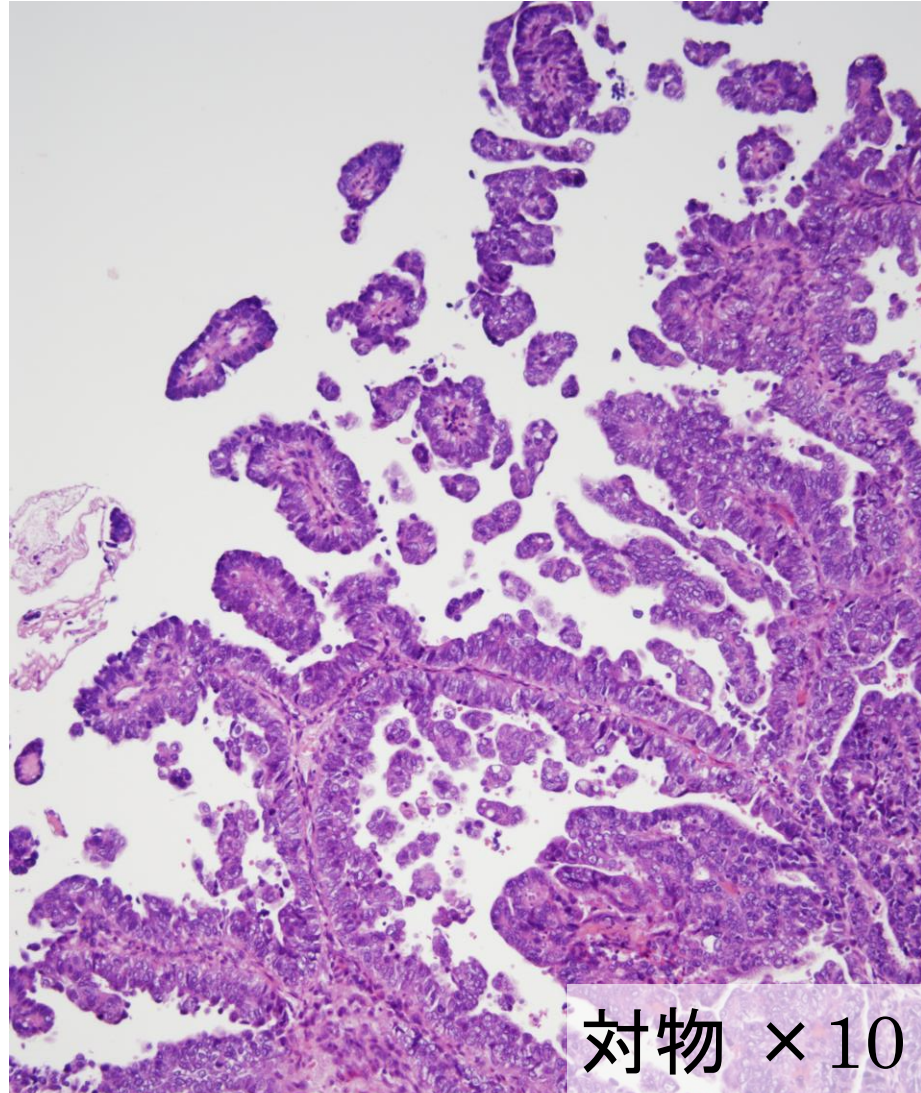
# 類内膜腺癌



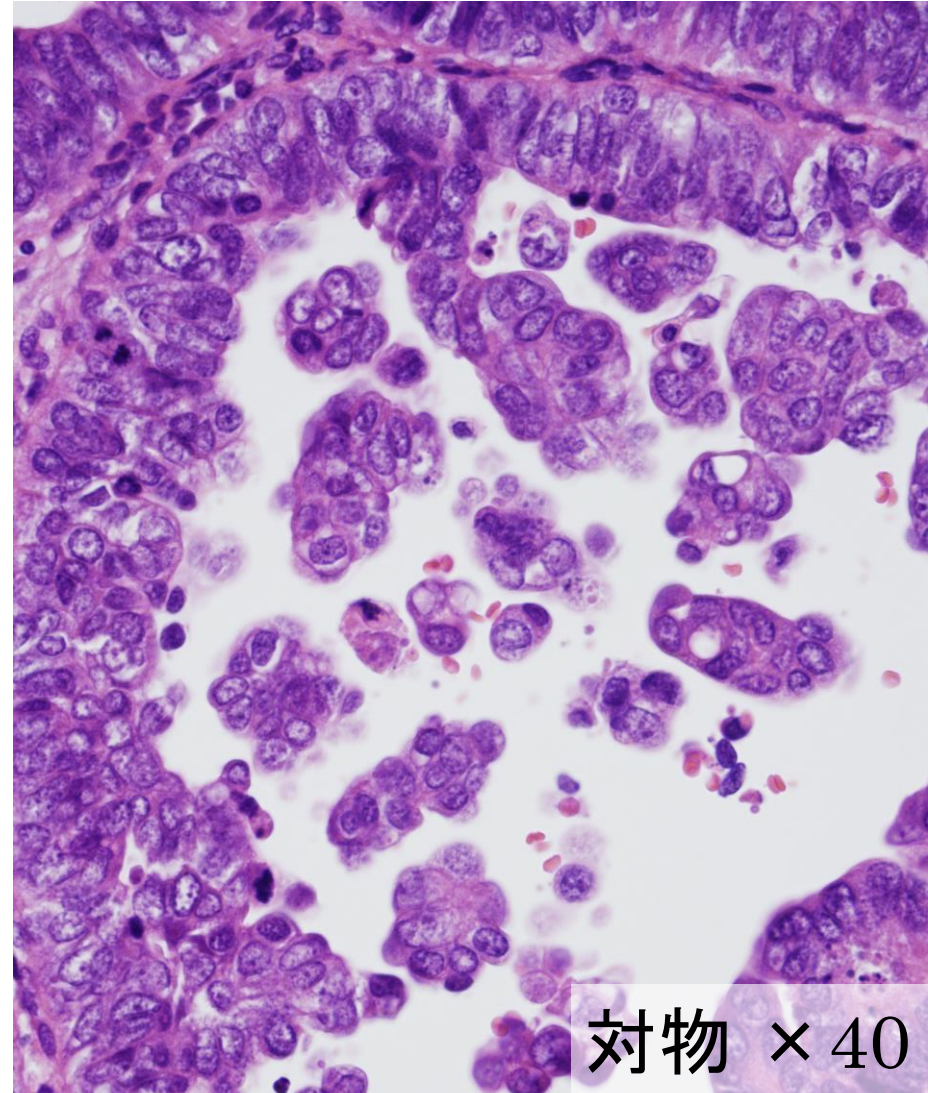
腺管が密に増殖し、篩状構造を呈する。



# 漿液性腺癌



対物 × 10

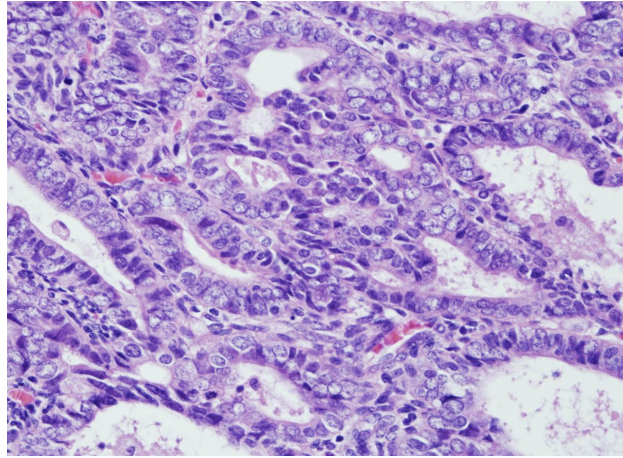


対物 × 40

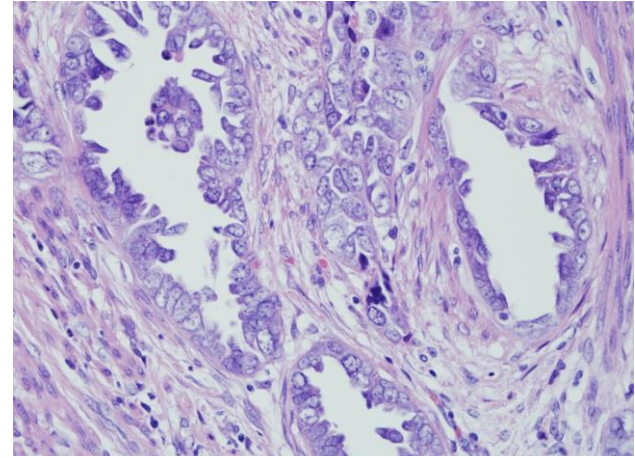
N/C比の高い異型細胞が乳頭状に増殖し、芽出や空胞を有する異型細胞もみられる。



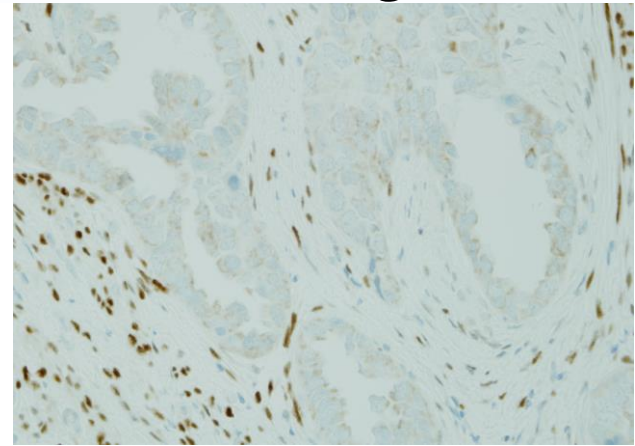
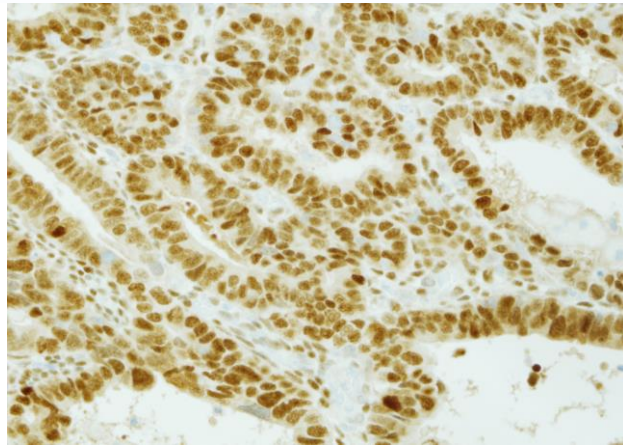
# 免疫組織化学



類内膜腺癌 PgR (陽性)



漿液性腺癌 PgR (陰性)



	ER	PgR	p53	vimentin	WT-1
類内膜腺癌	+	+	過剰発現なし	+	-
漿液性腺癌	+	-	過剰発現なし	+	-



# 組織学的診断

## 混合癌

(類内膜腺癌 G2 + 漿液性腺癌)

Mixed carcinoma of the uterus

# 混合癌 mixed carcinoma

子宮体癌取扱い規約【第3版】より

## A. 上皮性腫瘍と関連病変 Epithelial tumours and related lesions

- 1) 子宮内膜ポリープ endometrial polyp
- 2) 子宮内膜増殖症 (non-atypical) endometrial hyperplasia
- 3) 子宮内膜異型増殖症 atypical endometrial hyperplasia
- 4) 子宮内膜癌 endometrial carcinoma
  - a) 類内膜腺癌 endometrioid adenocarcinoma

### ◆変異型

- (1) 扁平上皮への分化を伴う類内膜腺癌 endometrioid adenocarcinoma with squamous differentiation
- (2) 絨毛腺管型類内膜腺癌 endometrioid adenocarcinoma, villoglandular variant
- (3) 分泌型類内膜腺癌 endometrioid adenocarcinoma, secretory variant
- (4) その他 others
  - b) 粘液性腺癌 mucinous adenocarcinoma
  - c) 漿液性腺癌 serous adenocarcinoma
  - d) 明細胞腺癌 clear cell adenocarcinoma
  - e) 扁平上皮癌 squamous cell carcinoma
  - f) 移行上皮癌 transitional cell carcinoma
  - g) 小細胞癌 small cell carcinoma
  - h) 未分化癌 undifferentiated carcinoma
  - i) 混合癌 mixed carcinoma

## 混合癌 mixed carcinoma

【定義】複数の組織型が混在する癌腫で、各成分は腫瘍全体の10%以上を占めるものである。

➤ 類内膜腺癌の中に扁平上皮癌成分が混在する癌腫は混合癌には含めない。



# 混合癌 mixed carcinoma

発生頻度 (当院における2年間の統計データ)

6.7% (子宮内膜癌386例中26例)

粘液性腺癌＋  
類内膜腺癌 1例

明細胞腺癌＋  
小細胞癌＋  
類内膜腺癌 1例

漿液性腺癌＋  
明細胞腺癌 1例

大細胞神経内分泌癌＋  
類内膜腺癌 2例

明細胞腺癌＋  
類内膜腺癌 11例

漿液性腺癌＋  
類内膜腺癌 10例

予後

一般的にⅡ型腺癌(漿液性腺癌や明細胞腺癌)が25%以上を占めると予後不良とされている

- 当院では類内膜腺癌以外の成分の有無で、術式が異なるため、術前の組織診や細胞診で類内膜腺癌以外の成分が含まれているかを確認することは臨床的に重要となる。
- 漿液性腺癌や明細胞腺癌の成分があることで術後再発リスクも高くなる。

## 子宮体癌術後再発リスク分類

低リスク群	中リスク群	高リスク群
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 類内膜腺癌 G1あるいは G2で筋層浸潤1/2未満</li> <li>• 子宮頸部間質浸潤なし</li> <li>• 脈管侵襲なし</li> <li>• 遠隔転移なし</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 類内膜腺癌G1あるいは G2で筋層浸潤1/2以上</li> <li>• 類内膜腺癌G3で筋層浸潤1/2未満</li> <li>• 漿液性腺癌、明細胞腺癌で筋層浸潤なし</li> <li>• 子宮頸部間質浸潤なし</li> <li>• 脈管侵襲あり</li> <li>• 遠隔転移なし</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 類内膜腺癌G3で筋層浸潤1/2以上</li> <li>• 漿液性腺癌、明細胞腺癌で筋層浸潤あり</li> <li>• 付属器・漿膜・基靭帯進展あり</li> <li>• 子宮頸部間質浸潤あり</li> <li>• 腔壁浸潤あり</li> <li>• 骨盤あるいは傍大動脈リンパ節転移あり</li> <li>• 膀胱・直腸浸潤あり</li> <li>• 腹腔内播種あり</li> <li>• 遠隔転移あり</li> </ul>



# 組織学的診断および細胞診判定の比較 (1)

Case	組織学的診断	術前細胞診判定
1	類内膜腺癌 > 大細胞神経内分泌癌	類内膜腺癌
2	漿液性腺癌 > 類内膜腺癌	Malignant cells (類内膜腺癌G3, 癌肉腫を鑑別)
3	粘液性腺癌 (M) > 類内膜腺癌 (E)	混合癌 (M:E=5:5)
4	漿液性腺癌 (S) > 類内膜腺癌 (E)	混合癌 (E:S=7:3)
5	漿液性腺癌 > 類内膜腺癌	類内膜腺癌
6	明細胞腺癌 > 類内膜腺癌	類内膜腺癌
7	漿液性腺癌 > 類内膜腺癌	類内膜腺癌
8	明細胞腺癌 > 類内膜腺癌	類内膜腺癌
9	明細胞腺癌 > 類内膜腺癌	明細胞腺癌
10	明細胞腺癌 > 類内膜腺癌	類内膜腺癌
11	類内膜腺癌 > 漿液性腺癌	類内膜腺癌
12	漿液性腺癌 (S) > 類内膜腺癌 (E)	混合癌 (E:S=6:4)
13	類内膜腺癌 > 明細胞腺癌	類内膜腺癌
14	類内膜腺癌 (E) > 漿液性腺癌 (S)	混合癌 (E:S=6:4)
15	類内膜腺癌 > 明細胞腺癌	類内膜腺癌
16	類内膜腺癌 > 明細胞腺癌	類内膜腺癌
17	類内膜腺癌 > 明細胞腺癌	類内膜腺癌
18	類内膜腺癌 > 大細胞神経内分泌癌	類内膜腺癌
19	類内膜腺癌 > 漿液性腺癌	類内膜腺癌
20	類内膜腺癌 (E) > 漿液性腺癌 (S)	混合癌 (E:S=7:3)
21	漿液性腺癌 (S) > 明細胞腺癌 (C)	混合癌 (C:S=8:2)

➤ 組織学的に混合癌と診断された症例の28.6%が細胞診でも推定されていた(21症例中6症例)。

## 混合癌と推定できた症例

➤ 両成分とも少なくとも3割程度以上みられることが多い。

\* 5症例は術前内膜細胞診施行せず

## 組織学的診断および細胞診判定の比較 (2)

Case	組織学的診断	術前細胞診判定
1	類内膜腺癌>大細胞神経内分泌癌	類内膜腺癌
2	漿液性腺癌>類内膜腺癌	Malignant cells (類内膜腺癌G3, 癌肉腫を鑑別)
3	粘液性腺癌 (M)>類内膜腺癌 (E)	混合癌 (M:E=5:5)
4	漿液性腺癌 (S)>類内膜腺癌 (E)	混合癌 (E:S=7:3)
5	漿液性腺癌>類内膜腺癌	類内膜腺癌
6	明細胞腺癌>類内膜腺癌	類内膜腺癌
7	漿液性腺癌>類内膜腺癌	類内膜腺癌
8	明細胞腺癌>類内膜腺癌	類内膜腺癌
9	明細胞腺癌>類内膜腺癌	明細胞腺癌
10	明細胞腺癌>類内膜腺癌	類内膜腺癌
11	類内膜腺癌>漿液性腺癌	類内膜腺癌
12	漿液性腺癌 (S)>類内膜腺癌 (E)	混合癌 (E:S=6:4)
13	類内膜腺癌>明細胞腺癌	類内膜腺癌
14	類内膜腺癌 (E)>漿液性腺癌 (S)	混合癌 (E:S=6:4)
15	類内膜腺癌>明細胞腺癌	類内膜腺癌
16	類内膜腺癌>明細胞腺癌	類内膜腺癌
17	類内膜腺癌>明細胞腺癌	類内膜腺癌
18	類内膜腺癌>大細胞神経内分泌癌	類内膜腺癌
19	類内膜腺癌>漿液性腺癌	類内膜腺癌
20	類内膜腺癌 (E)>漿液性腺癌 (S)	混合癌 (E:S=7:3)
21	漿液性腺癌 (S)>明細胞腺癌 (C)	混合癌 (C:S=8:2)

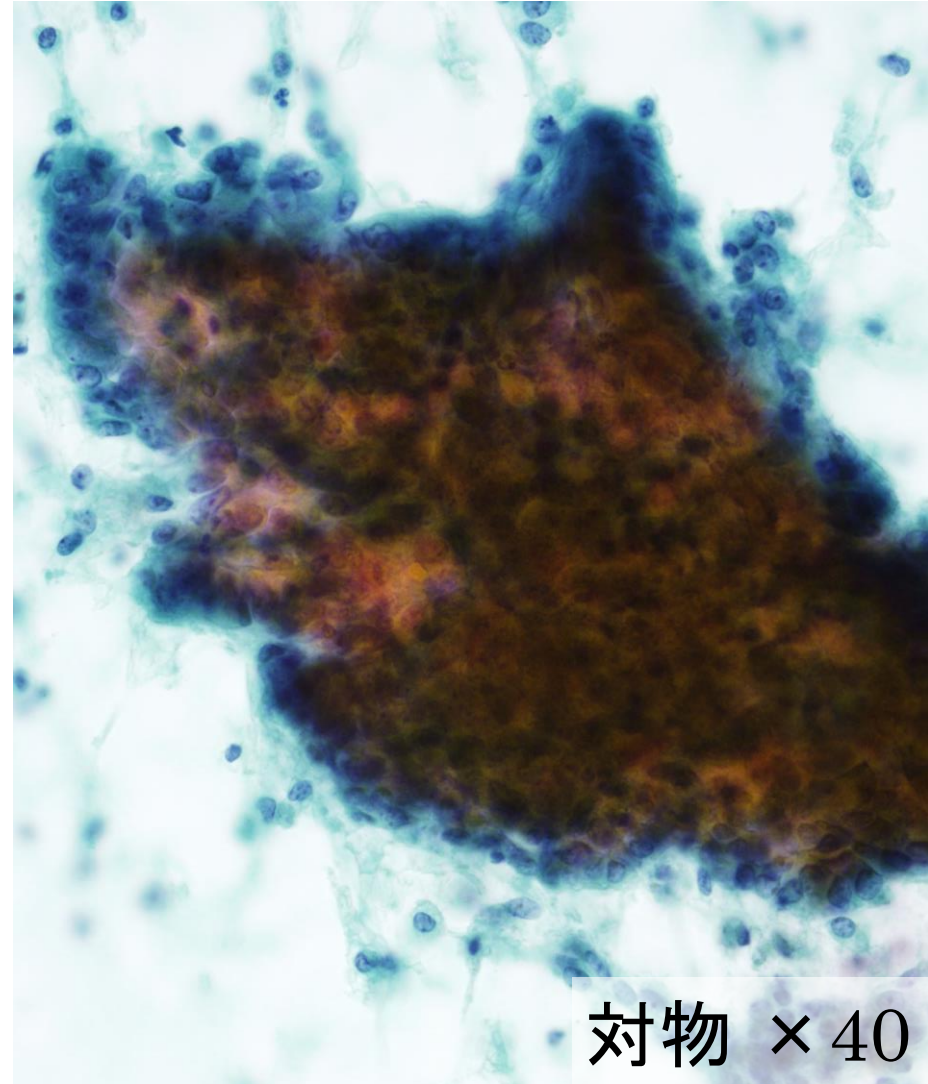
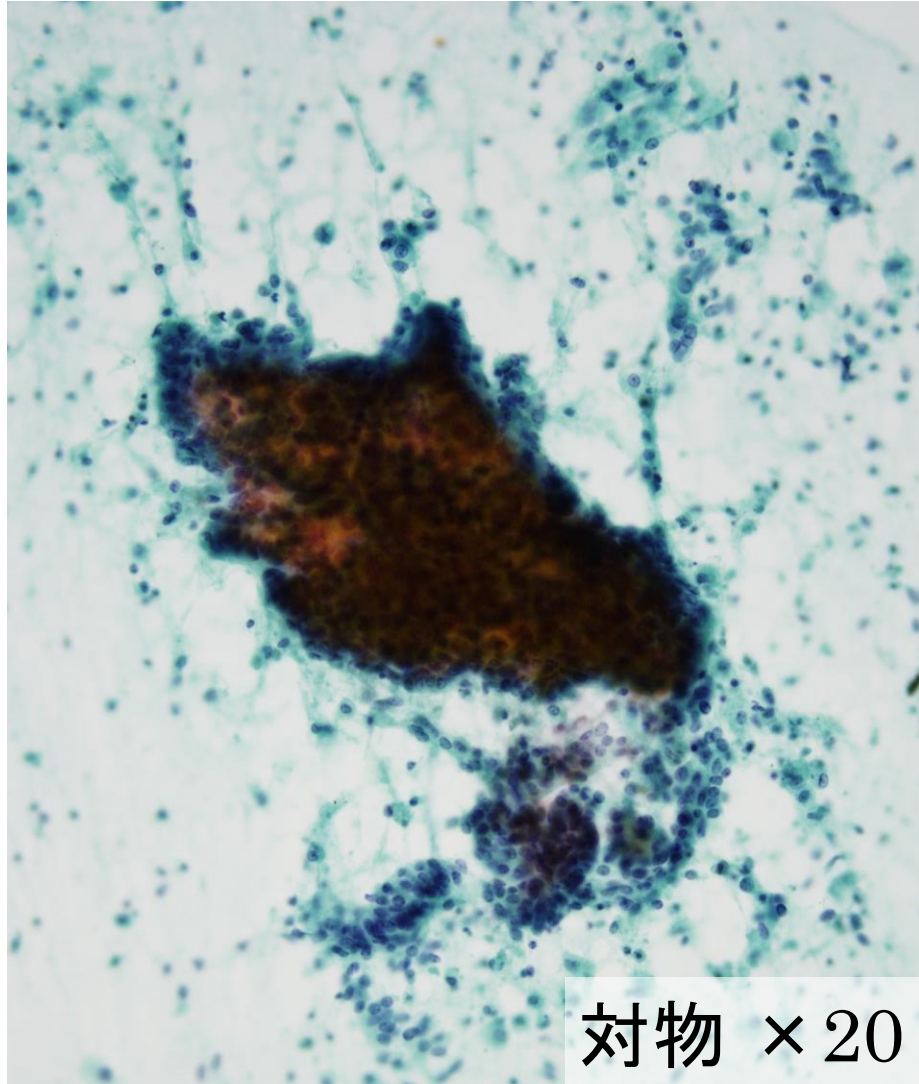
### 混合癌と推定できなかった症例

- 一方の成分しかみられない( )
- 両成分認められるが、一方の成分の出現量が少数のため、混合癌の推定に至らなかった。

少数でも違う成分と考えられる細胞所見がみられた際は、混合癌の可能性も加味し臨床に伝えることは、重要である。

\* 5症例は術前内膜細胞診施行せず

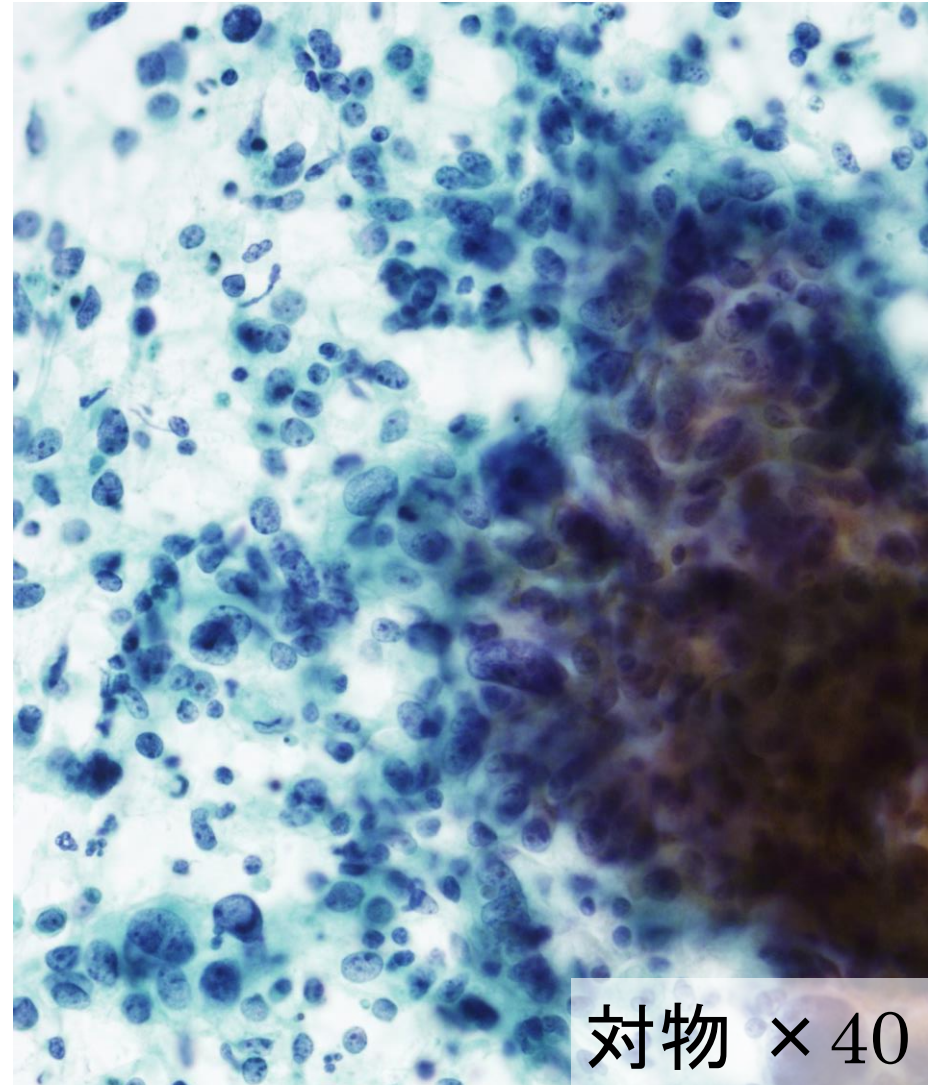
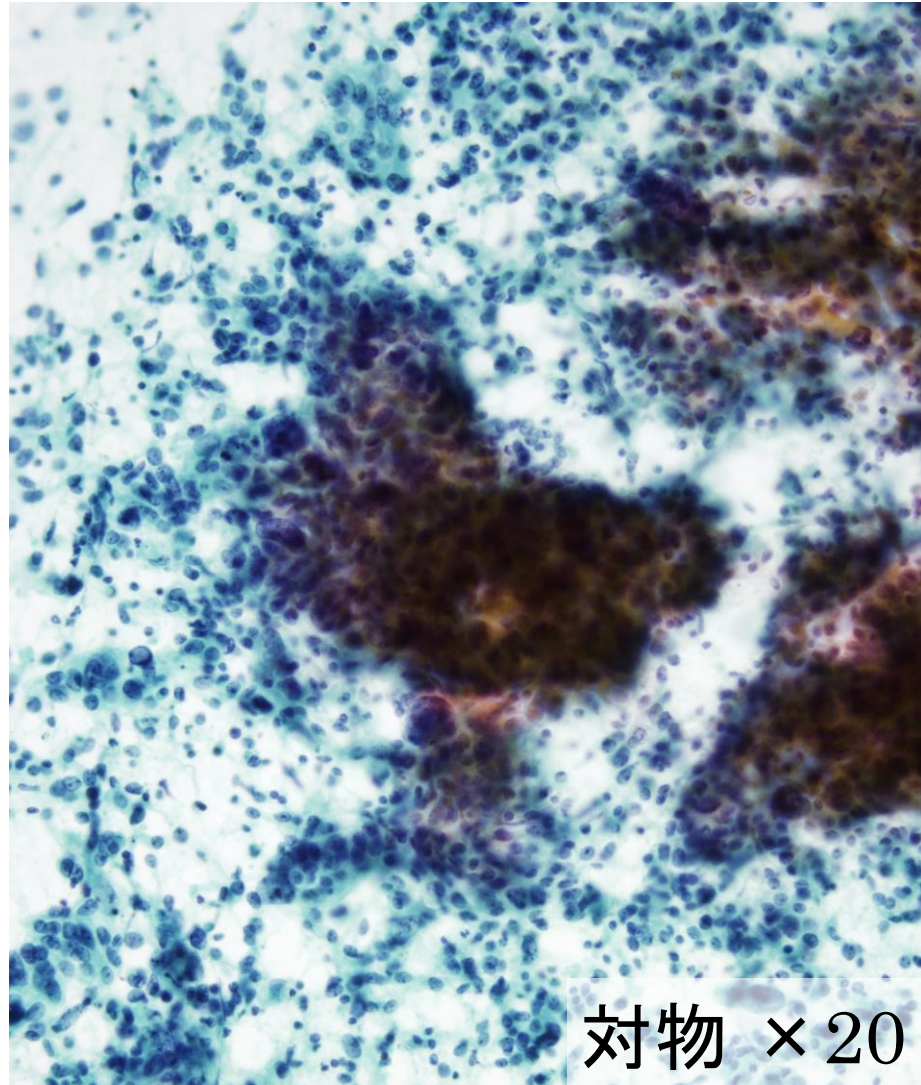
# 類内膜腺癌 G1



- 細胞異型は乏しいが高度な重積性を呈する細胞集塊
- 集塊辺縁ではほつれがみられる



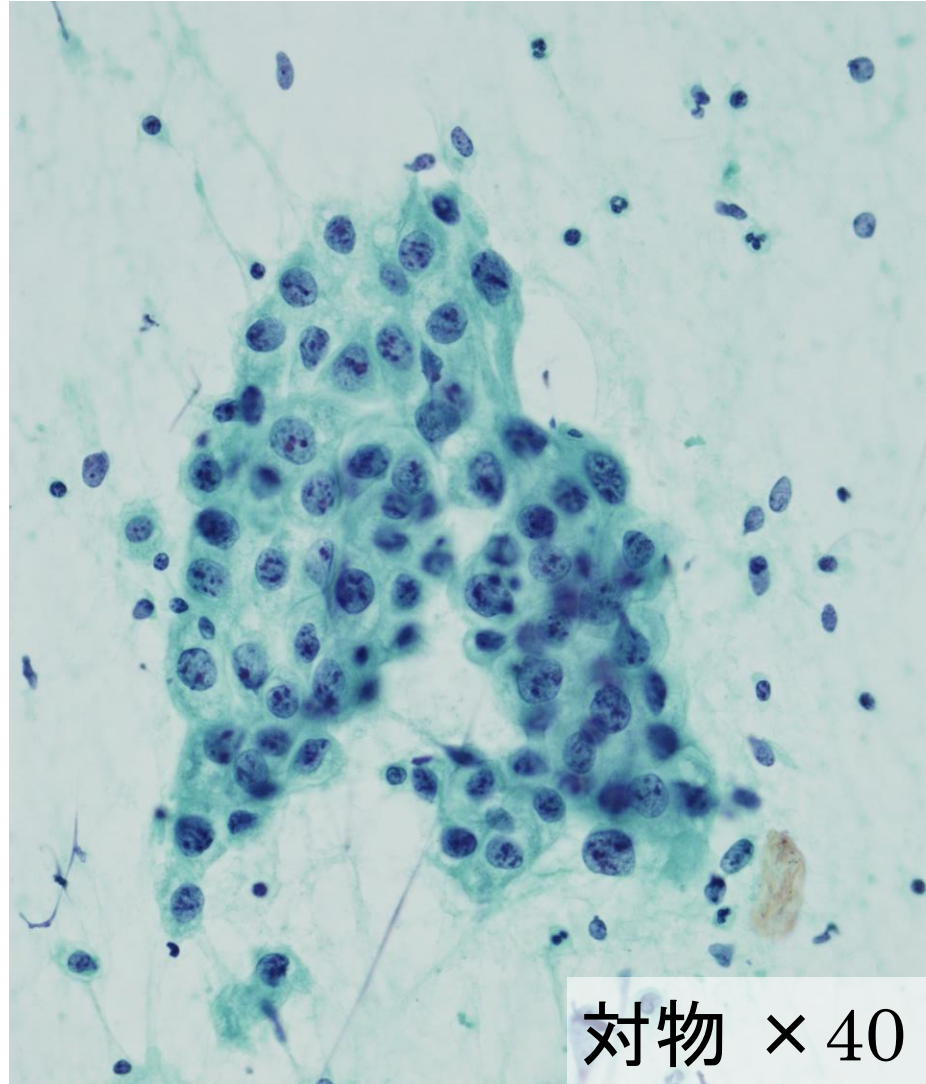
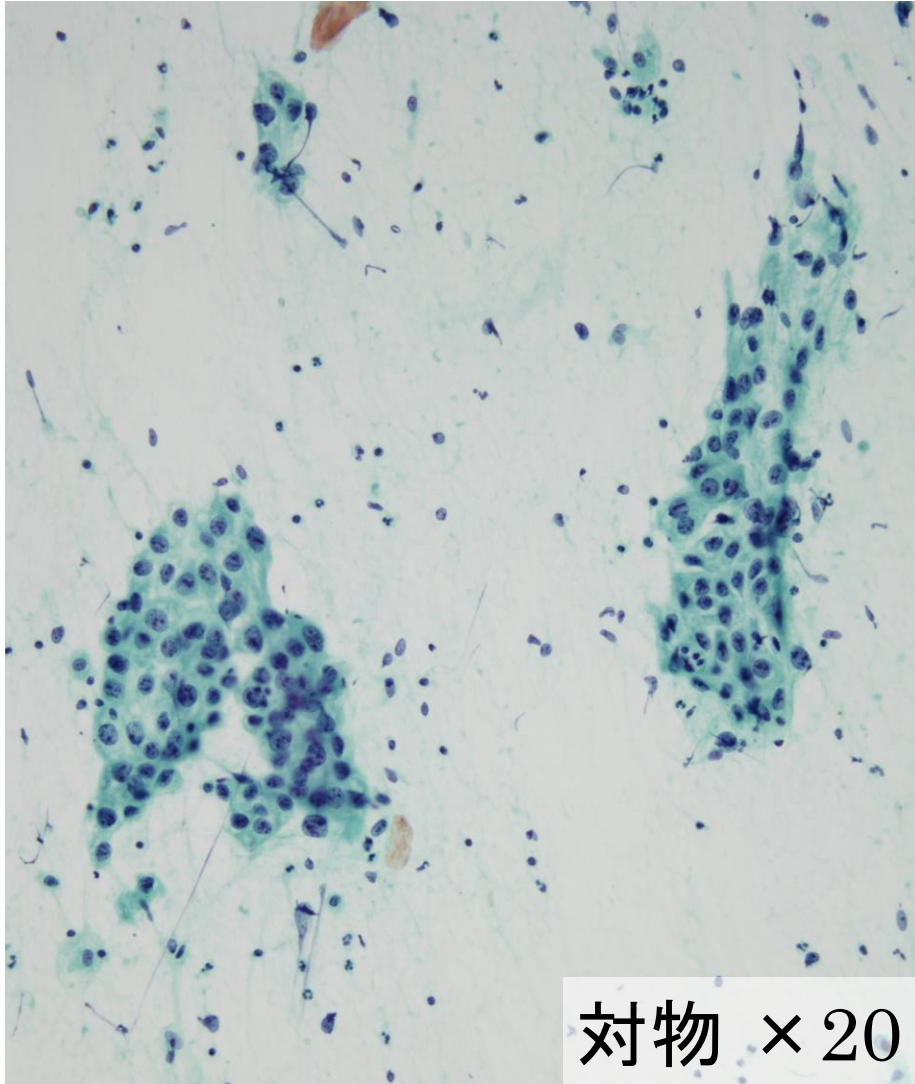
# 類内膜腺癌 G3



- 結合性の低下した集塊とともに孤立性細胞の出現が目立つ
- 核の腫大、核の大小不同が著明となる



# 明細胞腺癌



- シート状配列を呈する細胞集塊
- 淡明で豊富な細胞質を有し、明瞭な核小体もみられる

# まとめ

- 稀ではあるが混合癌が発生することがある。内膜細胞診をみる際、混合癌の可能性も念頭に置いて、鏡検することは重要であると考えられた。